

「児童研究」誌における童謡蒐集（六）

國 生 雅 子

本稿は「児童研究」誌における童謡蒐集（一）（「福岡大学日本語日本文学」十六号 平成18・12）、同（二）（「福岡大学研究部論集」A人文科学編九卷一号 平成21・5）、同（三）（「福岡大学日本語日本文学」二十四号 平成27・1）、同（四）（「福岡大学日本語日本文学」二十八号 平成31・1）、同（五）（「福岡大学日本語日本文学」二十九号 令和2・1）の続稿として、同誌に掲載された歌謡に関する記事を紹介するものである。今回は「児童研究」誌第六卷（明治三十六年 一九〇三）に認められる歌謡関係の記事を取り扱い、続きは別稿にゆだねることとする。

この年注目されるのは、七月、八月に掲載された埼玉の童謡である。寄稿者は七月号では「峯度 京平」、八月号は「峯岸 京平」となっているが、おそらく前者は誤植であって、「峯岸」が正しいのであろう。七月号の題名は「児童の口唱口吟」であるが、目次では「児童の俗謡及び其解説」となっており、続稿ではそれが題名となっている。解説中の記述から、師範学校生であることが知られる。また、紹介する童謡に示された地名から、埼玉県の利根川流域、群馬県に近い土地の出身と推測される。二〇世紀初頭の北関東の子供たちの生態を生き生きと伝えており、非常に興味深い。察するに、高島平

三郎の著作の熱心な読者であり、彼の影響を受けて童謡の採集、記録を思い立ったのであろう。悪童に揶揄われても言い返せない女児の「女権女勢」を嘆くなど、リベラルな側面を持つ青年である。また、他の集落との交渉の少ない、所謂「新平民」の部落に暮らす子供たちの童謡を記録している点も注目すべきであろう。

〈凡例〉

- ・「童謡」に限定せず、一般の歌謡も採ることとする。
- ・明らかに近年、明治になってから歌われ始めたものと考えられるものも、「児童研究」誌が目指した児童の歌の実態観察という視点から、江戸、もしくはそれ以前よりの伝承歌謡と区別せず取り上げる。
- ・漢字は現行の平易な字体に改めた。仮名遣いは原文のままとし、誤植と思われる箇所も改めてはいないが、特に「ママ」とルビを付していない。歌謡の性格上方言を用いたものが多く、誤植か否かを判じがたい場合が多いためである。原文のルビ、傍点等は残し、変体仮名は通常の字体に改めた。なお、読みやすくするために空白部を補った箇所は■で示した。

・ある地方で歌われる歌謡を紹介した記事以外にも、歌謡に関する記事は全て取り上げることとする。

・主に遊戯法、方言、俚諺を紹介した文献であっても、歌謡を一つでも含むものは採った。

・短歌、俳句、唱歌、創作、外国の子供の歌に関する記事は除外した。

・記事の掲載欄名は、題名の前に「」を付して示した。

・筆者名が記載されている場合は、題名の後に（）を付して示した。

・題名や署名が本文と目次とで異なる場合、本文に従った。

・注は各記事の最後に「＊」を付して示した。

明治36・3（6巻3号）

〔雑録〕琉球の子守歌

一、イヨイ〜。イヨイ〜。シム〜ミガ〜。ムイタテラハ。チタグワン。サバグワン。クコサナヤ。トーンヤ。マトン。アツカサヤー。イヨイ〜。ナークナヨー（解に曰く赤児よ、婦が守立てたならば、下駄も草履もはかそう、支那にも大和にも旅をさせよう、赤児よ泣くな）

一、イヨイ〜。イヨイ〜。シム〜ミガ〜。ムイタテラハ。ヌーヂギヤース。ユミナサヤー。カーラヤース。ユミナサヤー。ジククラヤース。マシナサヤー。イヨイ〜。ナークナヨー（解に曰く婦が守立てたならば軒木家又は瓦家の嫁になそう、錢蔵家又は米蔵家の主になそう、赤児る泣くな）

一、アンマヤ〜。マーカイガー。ユーナス。シチャンヂヌメマチガー。シユヤ〜。マーカイガー。ハルカイ〜。シムファイガー。アンマガ。モーラハ。チユークワツチー。シユーガ。モーラハ。シムクワツチー。イヨイ〜。ナークナヨー。（解に曰く母は何処に行くか、ヨナ木の下へ布巻きに行た、母が帰り来たならば乳の御馳走、父が帰り来たならば諸の御馳走させよう、赤児よ泣くな）（日本）

明治36・5（6巻5号）

〔雑録〕愛媛県神松名村地方に流行せる子守歌

- (1) かはいらしげな朝顔のたけのかきにまいておる
- (2) うらの柳の木にもずのすをかけて何をさへづるかど立聞きすれ
ばくる〜目のたまぎしつかいしよ
- (3) やれやかましやうどん屋の隣うどんそばきりやめてくれ
- (4) お、へぬかすなぶけんしやの子供せわにならなやちりほども
- (5) さんだん畑のさや豆はお前さんがはしれはみななはしる
- (6) 竹にたんじやくたなはたさまは思ひ〜の歌をかく
- (7) お、へぬかすな学校の生徒お、へぬかすと手が下る
- (8) ばんずい いちの子分のとうけん権兵衛まるのはだかにおけか
るて寺にしやしきへ骨ひろい
- (9) 月のあかりは丸くてふといなせに三ヶ月やせたのぞ、やせもせ
いじやい、やみあがり
- (10) 人らえいことや、ちそろばんならふて、わしもならいたい、ち
そろばん

- (11) 買ふてかづきなれ白手拭を白は目につくひんがよい
 (12) かはいらしげな学校の生徒席にもたれて本をよむよし
 (13) かはいらしいせやこーがの花よいつも御殿のふさのよー
 (14) ひや、つめたや手拭ほしや、しまのゆかたのきれほしや
 (15) どんどくとなる神様ようへは桑山おちやすまい
 (16) おしやか様さへばくちにや負けて四月八日にやまるばたか
 (17) 一分やんなれ木船の船頭まづば舟さや二朱くれたよー
 (18) 死んでなるかや二十二や三に宮のきしぶか立てらりよーか、宮
 のしきぶは立てらりよーけれどお手を合しておがまりーかよー
 (19) 思ひんななやみのなやみのやつれるに思ふてそはれる身ではない
 ー思ふてふはれるそはれる思ふて思ふてそはれる身ではない
 ー
 (20) おこりかんしやくおこつたらひどいよーなべもはがまも一うち
 よー

(二名津尋常小学校校長加藤正朝氏調査)

明治36・7(6巻7号)

〔雑録〕 児童の口唱口吟

(埼玉 峯度 京平 寄)

自分は、さる思ひ立ちより俚謡俗歌などを、集めて居つたが、未だ何雑誌へもよせないし、又発表も見合せて居るのである。ソコで今夏やすみにひまがありしましたから、表題の如きものをかきあつめました。もとよりふかく思考しての記述、採集でもない。まだく此の三十首の外に沢山あるのではあるが先づくこれ丈を以て、あとはあと、としませう。さて同好の読者があつて、一と通りなり眼

を通さる、ことがあつたならば、まことに本望も遂げらる、次第である。さて、此の三十個の口唱口吟の内容は、虫鳥獸など動物に十種ほど、氣候、地理、食事、学校などの思想にか、れるものが各二つほど、他の十余種は、人事に關せることである。尚ほ自分は、将来永く之に就而は心をくたく考へてあればみん人之を御よみになりしからは、御記憶にのこされていさ、かなりとも、材料の御交換を願いたいものであります。さてこれで寄稿の旨意と読者に御注意いたします、

一、大山どんぶ(蜻蛉)小どんぶ、親が来ないと、子を取るぞ、

(評説) 大山は親を、おーやといふべきを転じたるならんと考ふ。児童等竹箒など肩にして(心には吾人の動物採集に採集網を肩にせるを気取つて居るやも知るべからず)然かよんで居るのである。一日のあつさは、既に消え去つて涼風しきりなる時、路ばた、大辻、生垣の脇などに於てやつて居るのである。併し、親若し来らずんば子を以て甘心せんとはあんまりだ。

二、つのんたーいろく、(蝸牛)、今ま角出さないと利根のはたへ持つて行つて、首ばつたり、ぶつきるぞ。

(評説) 梅雨の頃、父母等は蓑に菅笠をもち、かひくしくも支度と、のへ、田植の野へと出かけて仕まつた。留守は老母が居るのみである。学校も農休みといひて二週間ほどづ、部長許多のもとに休みとはなつた。年頃の子は馬の鼻どりをする。ソコで子守などは、雨の長きにたえあきて、赤ん坊背負ふて傘さして、出かけるのである。忽ちに友とよびあひ、此の歌をうたひつ、籬のあたりをうろつくのである。沢山あ

つめて末には、児童料理などを試みることもあるそーな。

(以類上)

三、かア〜いわたれ、大きなかりは先きに、小さなかりはあとに、
がらがらがんがん……………。

(評説) 近年雁行を見ること、まことに稀であるやうになつたが、もしそれを見附けた時は、逸早く、かくとへる。而も先陣の功名をでも得たかの如くに大得意となるのであるが無邪氣と申すべきではないか。既に雁は通つてしまつた。(而も大歓迎の裡に?) 雲のかなたへ見えなくなつてしまつた。すると第二のがんがらがんを疾呼するのである。あ、無邪氣であると吾人は賛成にたえないのであるよ。

四、雀はち〜ちん三郎。鳥はか〜か〜勘三郎。

(評説) 別した意味もない。けれども此の頃の教科書や、唱歌などに、雀は忠、鳥は孝なる言葉があるものから、此の時間なんかは、必ず之を想起して一応の思案は幼き児童の脳中にも行はる、やうである。

五、と〜んびとろろ。いとやの屋根で糸まいて見せろ。……又とろやの屋根でとろすつて見せろ。

(評説) 冬の日、吹きたつ風の中に子供等はあそんで居る。するととんびは、ひよろ〜と声も高く清くなきつ、大環たままをくつて居る。すると。快活溼地たる児童は大音響に之を連呼するのである。

六、か〜らす〜(鳥)、お〜のうがちがや〜けるぞ(矢火)は〜やく往つて、ためかける。

(評説) 鳥が飛んで大空に見える。児童等は甚だ驚喜心にう

たる、ものと見え、忽ち此く呼ぶのである。ためかけろとは、小便のためのことである。俗、雷によりて起れる火事には、通常の水は消火の効がないが、ためならよいといふてある。蓋しこれのことであらうよ。

七、あ〜へる、あへる、あひるの脚にはか、とがない。

(評説) 鶯が池菓にこや〜やつて居る時など、然、よんで侮るのである。すると鶯は氣にかけて怒ると云ふのである。児童の同情心も趣味が少からぬが、又此の心作用もおもしろいものだ。(以類上)

八、犬はわん〜、猫にやあく〜。

(評説) 犬が見えるとか、猫が見えるとかすると、さうよんでさわぎたてるのである。幼稚園などでやつて居るところと相似て居るではあるまへか。

九、ねこ〜子猫。親猫子猫、

(評説) 猫が見えるときや、かくれた時などに、けた、まじき勢を以て呼ぶのである。又はいとも閑静なる態度をもてやることもある、

一〇、いたちこと〜。もとの道引つかへんないと、おのが子を捕るぞ。

学校がへりの時など、道ぞへの籬の下より向ひ側の籬にいたちがちよこ〜とかけこんでしまつた。まことに氣にさわるものである。又甚だ心さみしく感ずるものである。これは実に村俗がいたちは、ふりむいて人を見るとときには、前足の掌もて額の表ををほひ、遠見の形をする。その時にはコッチは眉毛をうるほして、精神をしつかりせぬと、だまされるぞと

(8) 広い世界に何くよくと枯木も芽が出りや花がさく。

(9) おーれこはヤのこ山の阪をあがりかねとヤ九十九段

(10) ねんねさしやりませ今日二十五日今日は此子の寺まいり。

(11) 守と通路もあるかによくへん、あるきまじよぜよおともだち

(12) けふも来なつたか、げだいふれさんよ、いつもかはらぬいもせや
ま。

(13) 雨もふれくしんばらくと水も出よく川八合。

(14) かはいきーさん北あめりかよ、しんぼなさればわしもないこー。

(15) わしのすきなは学校教師いつもはかまに黒はをり。

(16) 芝居見物にいて役者にほれて七日七夜さ小屋にねた。

(17) 沖のとなかに死ぬるは時節ぬすみしたほど恥はない。

(18) 今年豊あせにヤさヤ五石中に何石つもられん

(19) 稲の出ほこに風さヤ吹かにヤ秋は来なれヤ米かいに。

(20) 山に伐る木は沢山あれど学校やめるきは更にない。

(21) 私の父が日振の沖に浪にゆられて鯛をつる。

(22) 歌は千ある千九十九ある、色にまじらぬ歌はない。

(23) 守の背中乳あるなればたゞの一つも泣かしヤせん。

(24) 関のごんけんあらたの神よ、いかなる舟でも帆を下げる。

(25) 喜木津広早浪おそろしゃこ、に死んだら非業の死に。

(26) 一人娘を大平へやんな、ぬるはみみすく夜るかじた、く朝は水く
む身をやつす。

(27) さてもめでたヤこの盆は中にこがねのうづがまふ。

明治36・8 (6巻8号)

「雑録」児童の俗語及び其解説(前承)

(峯岸 京平)

一三、おーらが影になると、盆のぼたもちくれないぞ。三年疫病や
ませるぞ。(以上氣候に關して)

吾々の影になると、しか、ひどい目にあはせるぞと云ふので
ある。これは冬の頃、日あたりよき壁や塀などによつて、暖
を取つて居るところへ、あそび友などの来りて心なく影にな
ると、しか呼ぶのである。すると呼ばれた友は、吾れしらず
居るので、傍觀しつゝ、ある他の多くの友などに哄笑されて、
いぶかしく見まはして漸くにさとりつくことなどである。中
におかしくも氣の毒なることの少からぬことである。

一四、をどりは三ヶ尻、音統取りは瀬山。

これは盆をどりのうたの中の句である。まへどの(昔の)人
が、上州伊香保に行つた時其地のやぐらを借りて、しか云ふ
て、其の手ざわをなん、示したといふ、老人等の云ひ伝へで
あるが、子供等は何心もなく之を口にするのである。三尻瀬
山共に村つゞきの地名であつて、そんなことの昔しは盛であ
つたものと見える。(尚は故老に再問せん)

一五、横町へよめに入つて、原島ではらんで、小島で子をうんで、
利根川で取りあげて、中奈良で名をつけた。

これは六七歳から三四年間位までの児女等が、うたつてをる
のである。まことに太平らしくしかも一点のいやみもない。
児童のこゝろ、のどかなりと形容すべきまでによつてをるの
である。(否、児童には実に太平の神やとれる也) 其の地理的

観念は、こんなところからも養はるゝものらしい。(以上地理)

一六、と、(魚、肴) かつて(かて、) たんとまんまくへ(飯を) 魚をおかつにして、たくさん御飯をやれといふことである。た行の音が多くて、一致して居るので、快活によべる。ソコデ多くは急ぎ足の時に歌はるゝものらしい。(此項乞高島先生の心理漫筆第七十七参照)

一七、大食ひ、長食ひ、利根川杭。食ひと杭と連ねていふことである。もと田舎の小学で、教師の管理もなく、午飯をやるのであれば、一級の生徒はもよりの席につどうてたべ、おむすびの飯粉などほろほろこぼしつゝ、長食ひして居るのがあつた。それをしかよぶのであつた。(以上二項食物)

一八、ぢぢばばねてゝる(寝て居よ)。むこは起きてためかつげ、よめは起きて機を織れ。

これもやはり田植の頃、深みどりせる生籬などのほとりを、子守等がうたひあるくのである。籬にまとはつてをる草の一種に、ぢぢばばのくさといふのがあるのである。そのくさは、膝分はよく観察を遂げても見えぬが、纏繞茎のつる草である。花は極く小さな密徹花である。それを取りながらやつてあるくのである。雨の日のつれづれを子守等が自ら慰むるの、消夏法であるやら。此の口誦を鑑みるに、いさゝか純樸雅厚の趣がうかがはるゝ。乍去これが近年は殆んど聞くことも出来ぬやうになつた。自分がかつて、古風田舎風の子守歌、俗謡などのひなうたが、漸くよからぬ流行歌に、地をはらはうと

するのは、なげかはいと或る機会そにいふたが、やはりこれもくゝ同歌にたえぬのである。

一九、今日は二十八日、しーり(尻)まくり観音堂
児童等が多くは筒袖なるが、その長着の裾の背ぬひの処をつまみ、をさへ、前の帯にくゝりつけ足をかるくして、しかよんでかけまはるのである。思ふにこれは彼の「ろくぶ」なるもの、のいでたちを、まねるものであらう?。

二〇、お泣き、ないても黙し手がな。おしやれ、しやれてもほれてがな。

女生徒や女兒などでなきやすいのや、あまり身辺をかざりたてると、ものあらしき男の尻らにしかよばれてしまふのである。奇妙なるものである!。女兒として、かく二三呼されたりとせんか、二度と言ひかえしをし、又は言葉を戦はすというふ発言権は、全滅攪乱されてしまふのである。……あ敗北、あはれ、幼芽時代の女権女勢、!?

二二、女と男であそぶなよ。あそんでもよいからちつこすんなよ。又男と女で豆煎り、煎つても去つてもなーまぐさい。

児童は五六歳或は六七歳の頃は近隣の男女其の性を別たさず、いとも快くあそびたのしむものであるが、既に身体局部的羞恥の情が起らんとするころよりは、漸く相拒斥せんとするやうである。老祖母などは「お隣の理ちゃん、うちのくにちやんとは、あんなに仲よしであつたのに」……此間あひだはどうゆふものかなど不思議がるほどのことは決して稀ではあらぬが畢竟其の変化はこれに外ならぬのである。こゝに於てかであるよからぬ家庭に育つ児童なんかはあしきことと思はず何

とも心に介せで之をやるのである。乍去これは近年教育の普及によつて(?)まことに楽にも聞かれぬやうになつたといふのはまだしもよろこびである。

二二、をつか〜(お母さま〜)盆が来た。明日の晩からねらんねアイ

卑野極まつた、書くもいやではあるが真相をうつさうといふには仕方がない。読者よ諒しまへでもあるまいさ。児童といつて仕方ないものである。いかに家庭のとミのへる家の子なりとも、母のまへなりとても快活なる児童は之を高唱して遠慮はない。そこでこれには一席のいかめしうもつらぬられたる男士おとしまで、噴飯させられてしまふ。想ひげよ。?!? 此席上小学教師など小兒関係者たらんものは児童の心理的説明などは試むべき好機会たるに相違ないと。

二三、ぢ〜、ぢくなし。(軸なるか???)ば〜ばけもの(妖の意か)

これのみは、説明も詳明も仕方がない。こゝろありげなる郷友などや、古老にも語つて見るが明答は更らない。

二四、くわ〜した〜大火事だ。(実はくわにあらずか也)どうか、(道理で)火の子が飛んで来る。

これは田舎では六月十五日の前一週間或は一句、又朔日より同日数日間前などに、「おたきあげ」といふて八坂太神にさ、げまつるとの事で、麦わらなどを束ねてたき火を為すのである。又盆などの時も盆さまむかひに出る、送りまつるといふ時などにも同じたき火をするのである。此時に灰の火色もてるが、飛びまふのおもしろいと見えて、さげびたてるので

ある。が、盆さまの送迎には、さわぎたてるなどの事は勿論あらぬのである。

二五、あをがいふいた〜ぶう〜。

あをがいは意味判明せぬけれども唾を多く出したといふことであるらしい。これは何か失敗でもした時に疾呼してありくやうである。ソレデこの起原は、土地にかけると申すのがあつたときに伝へられたことであるそう一な。

二六、来た〜北山くづれて、上州が飢饉で、お女郎がひぼしだ〜。

これは数年前、上州辺からでも来たのであらう。みすばらしい飢うりが、いふて来た文句である。子供等は何気なしに、やつてあるいてをつた。近頃は耳にもあまりしない。

二七、よ〜め御、お方、(嫁)お方のふりでお里がわかる。

田舎の婚礼は存外仰々しいものである。それがすんで翌々日あたり、お郷帰りといふをするのである。この時はお供もぐつと少く親戚中の幾部分にかざるやうである。「ソレ一昨日のよめごさんが、お郷かへりだ。出て見ろ〜」と母や姉、乃至はおば〜さんなんか云ふ。見る〜既に見送つた。あとで子供丈になると、例によつて例の如くやるのである。よ〜めごお方の声は、いや高くかまびすしいのである。これは次の29項のと同じく交通少なる新平民等に見るのみである。

二八、おや〜庄介さん。えんどうまめがこげるよ。こげちや、いがいよ。

これもやはり25項のと同じく、影絵の結果でうえうつされたのであつた。かげゑの時に、どんな絵が出るかと云へば、傘の中から驚きたる顔出したる人形がある。これを此の口うた

にあはせてやらするのである。子供等は其のいかにも、ものさわがしくあるので、其の快活性に適するのであらう、いとも心よげに、うたひつゝ、ねつてあるくのである。(以上人事に就て)

二九、高等学校小学校。弁当ひよひばい(許り)やゝめろよ。又高等………。弁当ひよ飯はうまいか。

これは以前高等小学校へ通ふ子供の少かつた時分の事であつて、路ばたにむれしてあそんでをる。生徒がその中を分けて通りすぎるや、忽ち然か呼んだのである。尤もこれは新平民なる交通乏しき一部落のみで他には全然ない。(以上人事)

三〇、中学校だんぶくろ。ひろつて見たらば、ぬか袋。

まことに新意味なるやう、おぼえらるゝのである。これ恐らくは家庭よからず口さがなき母、婢女等の口より口づたへにはあるまいか。吾れ等師範生などが、休暇の時など帰田の途次、見あやまられて之れを適用されたこともあつたが、其のち再びとさることはないやうになつてしまつた。が、しかし其のよび声は、まだ依然行はれて居るやうである。(終)

* 高島先生の心理漫筆第七十七

高島平三郎『心理漫筆』(開発社、明治三二年六月)の第七十七項は「児謡」と題されており、子供の何気ない言葉が「歌謡的の口調を帯」びており、「マンマたべておんぶしてあっちいって」と韻を踏んだ一例を紹介し、「小児が天然の詩人たること」を称賛している。